

### モーツァルト:セレナード 第 13 番 ト長調 K.525 《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》

「セレナード」とは戸外で演奏される種類の楽曲で、モーツァルトのセレナードで楽譜が現存するのは 13 曲。そのうちこの《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》を含む 4 曲が、ウィーンでの所産である。本曲は 1787 年に作曲された最後のセレナードで、モーツァルトの作品のなかでも屈指のポピュラリティを誇る。しかしその作曲動機や初演に関しては不明な点も多い。本来は 5 楽章構成であったと考えられているが、第 2 楽章が散逸しているため、通常は 4 楽章構成で演奏される。

第 1 楽章「アレグロ」はソナタ形式。冒頭に登場する第 1 主題の旋律は、全曲中もっとも有名なもの。第 2 楽章「ロマンツェ」は三部形式。穏やかなメロディに包まれた楽章だが、ハ短調の中間部では少し不安の影が差す。第 3 楽章「メヌエット」は、はっきりと力強く刻む 3 拍子のメヌエットに対し、トリオでは一転して流麗な歌が流れる。第 4 楽章「ロンド」はソナタ風のロンド形式。軽快なロンド主題が躍動的に展開し、最後はたたみかけるような盛り上がりを見せる。

### J.S.バッハ:チェンバロ協奏曲 第 1 番 二短調 BWV1052 (ピアノ版)

バッハの協奏曲の中心を占めるのは、鍵盤楽器(チェンバロ/ピアノ)を独奏楽器に用いた作品で、1 台用のものは 7 曲(BWV1052-1058)ある。これらはバッハがケーテン時代(1717-23)に作曲した作品を原曲とし、のちのライプツィヒ時代(1723-50)に鍵盤楽器用に編曲したものである。ライプツィヒ時代にバッハが旧作の編曲をさかんに行なったのは、トーマスカントル(宮廷楽長)としての仕事のほかに、1729 年に大学生を中心としたオーケストラ、コレギウム・ムジクムの指揮者に迎えられ、彼らを指導するにあたり、再び協奏曲を作曲する必要性が生じたためであった。一連の協奏曲の作曲(編曲)年代は 1730 年代の終わりに集中しており、コレギウム・ムジクムの主な活動場所であった、ツィンマーマンの経営するコーヒーハウスで演奏された。

なかでもこの第 1 番は演奏機会が多い人気曲で、ヴァイオリンの奏法に類似した動きが独奏パートに見られることから、消失したヴァイオリン協奏曲を原曲としていると考えられている。3 楽章すべてが短調で、オーケストラ部の主題の展開と技巧性を駆使した独奏パートの完成度が見事である。

### メンデルスゾーン:弦楽のための交響曲 第 8 番 二長調

交響曲への習作とも言われる「弦楽のための交響曲」は全部で 13 作あり、メンデルスゾーンがまだ 12~14 歳(1821-23)の頃、家庭で催される音楽会用に書かれたもの。第 8 番は 13 歳の時、1822 年に作曲された。早熟な才能が反映された、内容的にも充実した楽曲である。自信作だったのか、すぐに管弦楽用に編曲されている。そして交響曲第 1 番が、このあと 15 歳(1824)の時に書かれた。

ゆるやかな序奏で始まる第 1 楽章は、テンポを速めて主部へとなだれ込む。第 2 楽章アダージョは、独特の雰囲気を持つ冒頭の和音から個性的な主題が紡ぎ出されていく。第 3 楽章メヌエットは一転して陽気な舞曲楽章となり、終楽章のアレグロ・モルトは、華々しいフィナーレへ向けて高揚していく疾走感が楽しめる。